

# 知求会ニュース

2018年09月

第67号

## ◎ 掲載記事紹介

1. 朝日新聞 朝刊 (平成30年5月11日発行) 第2 栃木・24面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄⑤において「選べぬ環境 問われる自覚」と題して、[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。
2. 朝日新聞 朝刊 (平成30年5月16日発行) 第2 栃木・18面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄⑥において「外国人生徒の進学阻む壁」と題して、[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。
3. 朝日新聞 朝刊 (平成30年5月25日発行) 第2 栃木・30面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄⑦において「学ぶ場提供し進路保障を」と題して、[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。
4. 朝日新聞 朝刊 (平成30年6月1日発行) 第2 栃木・24面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄⑧において「多様性への適応 教育に有益」と題して、[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。
5. 朝日新聞 朝刊 (平成30年6月8日発行) 第2 栃木・20面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄⑨において「「不法滞在者」からの手紙」と題して、[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。
6. 朝日新聞 朝刊 (平成30年6月15日発行) 第2 栃木・28面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄⑩において「不法滞在生む日本のあり方」と題して、[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。
7. 朝日新聞 朝刊 (平成30年6月22日発行) 第2 栃木・22面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄⑪において「夕張が象徴する地方の悲劇」と題して、[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。
8. 朝日新聞 朝刊 (平成30年6月29日発行) 第2 栃木・26面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄⑫において「足尾の盛衰 社会を問う」と題して、[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。
9. 朝日新聞 朝刊 (平成30年7月27日発行) 第2 栃木・22面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄⑬において「ミニバスケットで元気もらおう」と題して、[田巻松雄](#)先生の記事が掲載されました。
10. 朝日新聞 朝刊 (平成30年8月3日発行) 第2 栃木・22面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄⑭において「やり直し許されぬ外国人」と題して、[田巻松雄](#)先

生の記事が掲載されました。

11. 朝日新聞 朝刊 (平成 30 年 8 月 10 日発行) 第 2 栃木・20 面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田巻松雄<sup>⑤</sup>において「抵抗する意志 未来を拓く」と題して、**田巻松雄**先生の記事が掲載されました。
12. 内外教育 (平成 30 年 7 月 13 日発行) 第 6679 号・2-3 面に、あすの教育「翻訳システムで子どもと教師を支援」と題して、**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。
13. 毎日新聞 朝刊 (平成 30 年 7 月 27 日発行) 栃木・21 面に、「翻訳アプリ 教育現場に 外国人児童増加に対応 佐野で研修会」と題して、**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。

#### ◎ 国際学部だより

1. UUnow 第 46 号 (平成 30 年 7 月 20 日発行) 11 面に、「Welcome to 研究室&ゼミ」コーナーで「国際学部 表象文化論」が紹介され、**大野斉子**先生を初め、国際文化学科 4 年生 **西間木由佳**さん・**喬 書正**さん・**新井美羽**さん・**山口修平**さん、国際社会学科 4 年生 **佐藤みき**さんの記事が掲載されました。
2. UUnow 第 46 号 (平成 30 年 7 月 20 日発行) 15 面に、Utsunomiya University News に「国際学部生が外国人観光客への「おもてなし」を企画」と題して、**栗原俊輔**先生のコメントおよび企画した国際文化学科 3 年生 **陳菅野佳明**さん、国際社会学科 4 年生 **兼村花鈴**さん、国際社会学科 3 年生 **長佐和子**さんらのコメントが掲載されました。

**研究室訪問 49** 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

#### 「初めての日本での調査 -東日本大震災の被災地から-

留学生・交流センター **飯塚 明子**

高校を卒業してから欧米に留学し、ベトナム、スリランカ等の海外被災地で国際協力の仕事に従事してきた。海外の被災地でのフィールド調査は、外部から来た研究者、もしくは復興支援を行う支援者の立場なので、紛争や津波、洪水の壮絶な被災体験を聞きながらも、無意識ではあっても常に(外国人であるという)部外者の視点でいたのかもしれない。異なる文化背景を持つ外国人の研究者が的外れな質問をしても大目に見てくれたり、気を利かせた通訳の人がうまく調整してくれたりするだろうという甘えがどこにあったのかもしれない。

そのような私が 1 年半前から宇都宮大学で働き始め、初めて日本の被災地で調査を行った。東日本大震災の被災地である気仙沼の唐桑半島の漁村を訪れたのは、震災後 6 年を経っていた。宮城県内だが仙台からバスを乗り継いで 4、5 時間もかかる漁村で、聞き取り調査の約束時間に遅れないように前日から村に入った。そして前もって村を歩いて雰囲気をつかみビジターセンターに行き情報を収集した。唐桑は宮城県北東の気仙沼市の東方に位置

し、リアス式海岸の地形を持つ。漁業の町として栄えたが、漁業の衰退に伴い津波前から過疎化がすすんでいた。地域の語り部の人と村を歩いた。津波はこれまで幾度となく唐桑半島沿岸部の村を襲った。1896(明治 29)年、唐桑町の神の倉(かんのくら)の集落に 30メートル程の津波が来て田畑が被災した。その経験から集落の住民が土を盛って作った堤防の後が今も残っていた。2011(平成 23)年の東日本大震災では、唐桑半島の沿岸部は津波で壊滅的な被害を受け 100 人余が亡くなった。神の倉には、2011 年に沖合 50 メートルから流されて打ち上げられた百数十トンの「津波石」があり、津波の威力の大きさを物語っている。さらに半島の最南端まで歩くと、御崎(おさき)神社がある。気仙沼港から漁に出る船は全て沖合いから御崎神社に一礼して、大漁と航海の安全を祈り出発する。年に一度の御崎神社の夏季例祭では、御崎神社の神輿が港から船に乗り沖へ出て神酒と塩をあげて大漁を祈る。唐桑半島の沿岸部は複雑に入り込んだリアス式の海岸地形のもとに、地域ごとに多様な暮らし、文化や伝統が根付いている。津波前から伝わる集落ごとの郷土芸能は、地域の文化や産業、生活の中で生まれ伝承されてきた。その郷土芸能の関係者から聞き取り調査やアンケートの調査を行い、災害復興と郷土芸能の相関性について調べるのが調査の目的である。

日本でのフィールド調査は初めてだったので、前日から緊張して眠れず、調査当日の朝も食欲がなかった。災害後 6 年を経て今さら何を聞きにきたのかと思われたり、津波で被災した方を傷つけたり、怒られたらどうしようと思ひ、正直とても不安だった。当日は唐桑半島の 5 つの郷土芸能の関係者から、郷土芸能の由来、保存会の運営活動やメンバー、震災前後の変化等について 1 日話をうかがった。唐桑の鮪立(しびたち)という集落で数百年の歴史がある大漁唄込(だいらょううたいこみ)という郷土芸能は、当時和船が帰港する際に櫓を漕ぐ拍子に合わせて唄われ、入港の前から唄い始め、留守家族にいち早く水揚げ支度を促す伝達手段の役割を果たしていたと言われている。現在は遠洋漁船が動力船となり櫓を漕ぐ機会が減り、実際に船の上で大漁唄込が唄われることはなくなってきている。大漁唄込の郷土芸能は宮城県から岩手県の沿岸集落まで広がっているが、漁業の衰退や少子高齢化がすすんだ集落で、現在も活動している保存会は多くない。

唐桑半島の南端に位置する崎浜(さきはま)という集落にも 300 年以上前から伝わる大漁唄込がある。「海を愛し、海に感謝し、海に捧げる讃歌であり、豊穡の海から港入りする漁師の凱旋歌」と言われている。崎浜大漁唄込保存会のメンバーは、遠洋漁業を引退した漁師や沿岸漁業に従事したりしている 60 代から 80 代の漁師である。聞き取り調査は私の不安を一掃し、終始とてもなごやかにすすんだ。私の緊張を察したのか、女性の研究者の訪問は珍しいのか、「大学の若い女性の先生はいつでも大歓迎」と冗談を言いながら、郷土芸能や震災の話だけでなく、保存会に関わることになったきっかけや、幼少期に家で父親が大漁唄込を唄っていた話、長期間漁に出ていて徐々に集落に戻ってきた時の家族の話、漁師の飲み会である直会(なおらい)の話など、初めて訪問した私に冗談を交えながらいろいろな話をしてくださった。その中でも、「郷土芸能である大漁唄込は、長い歴史を振り

返ると、集落では多くの災害や、不漁、遭難などの苦難を経験するなどいろいろとつらいことがあったけど、先祖代々300年間唄い続けてきた唄は、そのたびに唄い手を励まし喜びを与えてくれるもの」とおっしゃったことが深く心に響いた。郷土芸能と災害復興の相関性に焦点を当てて、仮説を立証しようと調査をしている私はとても視野が狭くちっぽけに思えた。このように、日本での初めての調査は、調査結果として文章や数字には出てこない多くの貴重なことを学び終わった。

(2018年8月21日原稿受理)

**博士録 46** 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。今回は投稿予定者から入稿がありませんので次回以降に掲載を見送ります。

**知究人 35** 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

**海外だより 28** 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

**海外留学今昔 24** 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

## 「ドイツ留学体験記」

菅 里咲子

私は大学3年次の秋から約10カ月間、ドイツにあるトリア大学に留学しました。トリアとはドイツのどこにあるのだろう、と思う人も多いと思います。最初は私もそう思ううちの一人でした。しかしトリアでの留学生生活を終えた今、トリアはドイツのはしにある小さい街であるけれど長い歴史を持つ魅力的な街であると考えています。

まず私がトリアに到着して目にしたのはポルタニグラと呼ばれるローマ帝国時代に建設された大きな黒い門でした。ドイツ最古の街とは聞いていたけれど街中にどっしりと構えられているポルタニグラには目を奪われました。また、寮の窓からはブドウ畑を見ることができ、トリアならではの雰囲気を感じることができました。学校までは毎日バスで通っていたのですが、学生証を提示することによって無料で市内バスに乗ることができるためバス内は学生であふれていました。休日は街中へと買い物に出かけることも多かったのですが、日曜日はスーパーなどが営業しておらず不便に感じることもあったけれどゆったりと時間の流れる休日は心身共にリフレッシュされました。

大学の授業はオリエンテーションプログラムを経た後、正式に始まりました。オリエン

テーションプログラムを通して他国の留学生と仲良くなることができ、その後の留学生活がとても充実したものになりました。私はドイツ語学科に所属していました。そこで留学生向けのドイツ語の授業以外に、大学で行われる正規の授業も受講しましたがドイツ語の知識が十分でない私にとっては厳しいものでした。そのため単位を取得することはできなかったけれど、授業には片手に辞書を持って臨んでいたためドイツ語を学ぶという点においては大きな経験になったと思います。

またドイツにはタンデムという互いの言語を教えあう制度があります。この制度にはとても助けられました。とくにトリア大学には日本語学科があるため、日本語学科の主催するイベントなどに参加することによりタンデムパートナーを見つけることができました。授業や教科書で行う勉強とは違い、生きたドイツ語を学ぶことができると共に現地で友人をつくる、そして日本語を教えるということができました。また大学で日本人の日本語教師の方にお会いする機会もあり多くの話をきくこともできました。日本語教育に興味のある私にとってはとても充実した時間でした。

最後に、留学生・国際交流課の方々、先生をはじめお世話になった方々に感謝申し上げます。交換留学を通して、日本では得られない経験や人脈を得ることができました。このような素晴らしく貴重な機会を与えていただき大変嬉しく思います、ありがとうございます。

(国際学部 国際文化学科 第4年次在校生)

(2017年8月18日原稿受理)

## 「ドイツ留学体験記」

若林 夏奈

私は2017年9月から2018年の7月までの約1年間フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルクに交換留学生として留学させていただきました。私が住んでいたエアランゲンは南ドイツであるバイエルン州に位置しており、西側に大きな森また町の中心には大きな庭園があるように緑豊かな一方、大学の町でありシーメンスという大きな会社がある町なので人が多く、静かな中にも活気のある町です。12月にはクリスマスマーケット、5月にはベルクキルヒヴァイと呼ばれるオクトーバーフェストのような祭りがありとても賑わいを見せます。

そのようなエアランゲンに私はドイツ語の語学力の向上と文化交流を中心に活動しました。大学では外国人留学生のために開講してあるドイツ語の授業を中心に履修しました。また夏休みと春休みにはそれぞれ約2週間のドイツ語集中講座があり、休みの間でもドイツ語を忘れることなく向上することが出来ました。またその集中講座や普段のクラスで他国から研究や交換留学に来ている学生と知り合い、授業内でも授業外でもお互いの文化について話す機会がありドイツにいながらも他国の文化に触れることができました。

日本人留学生は大学の日本学の学生と知り合う機会が多くあります。週に1回日本学の

学生が開いている交流の場があり、そこでパーティーがあつたり映画を鑑賞したりして現地の学生とコミュニケーションをとりました。空きコマにはその交流の場で仲良くなった学生や先生が仲介してくださった学生と、1対1でお互いのドイツ語・日本語を助け合う「タンデム」を行いました。宿題でわからなかったところや文化について質問し話し合いました。タンデムパートナーの日本語へのアドバイス、また文法的な質問に答えることは想像以上に難しく、日本語教育に少し興味があつた身としてどのようなことが伝えることが難しいのか、どのようなことが難しいと感じるのかをタンデムという場で学ぶことが出来ました。

留学を通して自分が当初勉強したかった分野だけでなく、今まで授業を履修していなかったような分野にも興味を持つようになりとても刺激を受けました。このような留学で受けた刺激を自分の今後の勉強に繋げていこうと思います。最後になりましたが、留学をサポートしてくださった留学生国際交流課様、渡邊先生、エアランゲン大学の皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

(国際学部 国際社会学科 第4年次在校生)

(2018年8月20日原稿受理)

**学生サロン 15** 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

### 「宇都宮大学国際協力サークル KAKEHASEEDS」

代表 坂井 友亮

大変喜ばしいことに、KAKEHASEEDS(カケハシーズ、以下カケハシ)は2018年で創立20周年を迎えました。これまで私たちは地域で行う国際協力に絶えず挑戦し、成功はもちろん、より多くの失敗を幾度となくを繰り返してきた私たちカケハシはなぜ活動を20年も継続してこられたのでしょうか。時間を巻き戻して見てみましょう。

1970年代、バングラデシュ独立戦争後の復興支援として、日本から数多くの青年が派遣されました。教育、農業、建築など、彼らは様々な面での復興活動に携わり、その熱意は任期を終えた後でも静まることはなく、有志一同によりHBC(ヘルプ・バングラデシュ・コミティ)が1972年に結成され、引き続き現地への支援活動が続行されます。後に、HBCはNPO法人として認定され、名称を「シャプラニール=市民による海外協力の会」(以下シャプラニール)と改め、今もなお積極的に活動を展開しています。そして、シャプラニールには全国に分散している地域連絡会が存在しており、栃木県宇都宮市にそのうちの一つである「シャプラニールとちぎ架け橋の会」(以下とちぎ架け橋の会)が1998年に設立されています。その代表を勤めていらっしゃるのが当時バングラデシュの首都ダッカにて農村開発プロジェクトを立ち上げた第一人者であり、過去にシャプラニールの理事として活躍されていた吉田ユリノさんです。

カケハシ発足は、当時宇都宮大学国際学部4年のとある学生が宇都宮市で活躍するユリノさんに「是非一緒に活動を」という旨で長文の親書を送ったことがきっかけでした。20年前のその頃、初期メンバーはたったの4人でした。この時、学生を一つの括りにしてサークル化するという発想にはまだ至らず、学生たちはとちぎ架け橋の会の一員として活動に加わる形式でした。

2000年前後、とちぎ架け橋の会（及び学生たち）はバングラデシュの現地を再現した学生による劇団活動を開始します。演劇で使用する道具はもちろん、シナリオまで全てオリジナルで考案したものでした。実際に演劇を観てくれた人たち、特にバングラデシュ出身の方々は目に涙を浮かべて感動していたと言われています。そして、当時のシャプラニールの事務局長が、「日本とバングラデシュを繋ぐ架け橋の種をまく=架け橋+Seeds（種）」という意味を込め、この劇団を「KAKEHASEEDS」と名付けました。

そして、私たちは今や宇都宮大学の認定学生団体として、地域で国際協力を啓発するイベントを開催したり、教育の現場で講演をしたり、そしてシャプラニールの「クラフトリンク」の扱うバングラデシュ（及びネパール）で生産された手工芸品を販売したり、はたまた、色々な繋がりであることやこんなことにも関わったりしています。

国際協力は、必ずしも海外で実施されるものではなく、国内にいてもできることはあります。私たちはこの20年間、それを絶えず探ってきました。私たちの今掲げているキーワード「フェアトレード」が一概に良い面だけを強調できないように、国際協力は盲目に一つの手段にのみめり込むことではないはずです。人間関係が冷め始めている今の社会の中でカケハシは訴え続け、心と心をつなぐ架け橋の種をまき、そして育んでゆくでしょう。

（国際学部 国際社会学科 第4年次在学学生）

（2018年8月20日原稿受理）

**キャリア指南12** 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

### 「異分野融合で研究・人間の幅を広げる」

吉葉 恭行

同窓生のみなさまこんにちは、国際社会学科第1期（1999）卒業の吉葉です。

私は現在、岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科の教授として教育・研究に携わっています。当研究科は医工連携・文理融合をすること（統合科学）により、少子高齢社会が抱える様々な課題の解決策を考究し、「元気」で「幸福」な状態（Health）を実現するための人・モノ・制度等の様々な「要素」とそれらの「関係」（System）を新たに創出する人材の育成を目指して本年4月に新設されました（詳細はwebページを参照ください）。

上述のように、当研究科では **Health System** という用語の意味を広く捉えていますので、医療や介護の現場や家族の問題、技術的・法的・制度的問題のみならず、格差・貧困・ジェンダー問題などの様々な研究ができる可能性を秘めた教育・研究環境であると思っています（大学院学生募集中です）。

私の専門は科学技術史・技術論で、とくに日本の科学や技術について歴史学的手法で研究しています。宇都宮大学国際学部では藤田和子研究室でマレーシアをフィールドとして技術移転に関する卒業論文をまとめました。後に東北大学大学院国際文化研究科に進学し、技術移転論を深化させ 2005 年に博士論文にまとめました。大学院修了後は、縁があって『東北大学百年史』の編纂に携わりながら日本の科学技術政策と大学の戦時研究について研究を進めてきました（拙著『戦時下の帝国大学における研究体制の形成過程：科学技術動員と大学院特別研究生制度 東北帝国大学を事例として』をご一読ください）。

2010 年ごろからは上記の研究と平行する形で、ケア（医療・介護）技術の発展と老年観・死生観の変容をテーマとする研究に着手し現在に至っています。技術移転論から大学史研究、そしてケア技術といった研究の展開は、一見すると無節操に変転しているようにみえるかもしれませんが、しかし、これらの研究の通底しているものは、技術と労働、科学技術政策と科学技術の発展、科学技術の国際的交流といった科学技術史・技術論におけるキーワードと諸問題であり、また歴史的連関性もある重要なテーマであると思っています。

近年自覚しつつあるのですが、私の研究スタイルの特徴は、異なる分野の研究者たちとの共同研究（異分野融合）に積極的に取り組むという点にあるのだと思います。この志向は学際的研究を掲げて創設された宇都宮大学国際学部で基礎づけられ、東北大学大学院国際文化研究科と東北大学百年史編纂室で培われたものであると考えています。異分野の研究者との交流を進めていくことが、視野や研究のみならず人間の幅も広げてくれたと思います（ずいぶん失敗もありましたが、笑）。

私のキャリアがみなさんの参考になるかどうかはわかりませんが、ひとついえることは「あと一歩だけ前に踏み出す」という意識がとても大切ということでしょうか。

最後に、繰り返しになりますが学生募集中です。興味を持たれた方は下記アドレスにご一報ください。yoshiba@okayama-u.ac.jp (@を半角英数に変換してください)

(国際学部 国際社会学科 第1期卒業生)

(2018年8月20日原稿受理)

**フォーラム** 2018年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

### 「祭りから地域の実態が見える」

渡邊 裕介

私は2018年春まで宇都宮大学大学院国際学研究科国際社会研究専攻で学ばせていただきました。社会人学生として、ラジオ放送局の業務と2足のわらじでの2年間。入学当初は

インバウンド（訪日外国人旅行者）を軸に、実地調査から見えてくるものを研究テーマにしようかと考えていましたが、実際に調査地域の日光市世界遺産周辺で住人の方々に話を聞いたところ、「祭りを支える地域の人びとの生きざま」に地域社会の根幹があるように感じ、テーマを「神事・祭事の地域研究—栃木県日光市の社寺文化—」に変更して研究を進めました。

小松和彦先生の「祭りとイベント（1997）」などの先行研究でも、全国の祭りが存続するために、「見せるための祭り」に変化をしていることが報告されていますが、日光も例外ではなく、むしろ大きな観光資源として欠かせないものになっています。一方で、人口減少の影響が祭りにも大きな影響を与えていました。1200年の歴史を持つ日光二荒山神社の「弥生祭（4月）」でも、家体（山車）の繰り出しができなくなった町が出てきたり、日光東照宮の「春季例大祭（5月）」でも、神輿の担ぎ手が足りなくなり、新たに神輿を担ぐ組織を作ったり。祭りの歴史の中には、大小さまざまな変化の許容がありました。さらに、これらは神事や儀礼とは区別された「付け祭（ツケマツリ）」になるため、神社側の意思ではなく、市民レベルで知恵を絞った結果。研究の中で、あらためて「伝統とは変わりゆくもの」であると実感するとともに、今後さらなる変化がどのようなものになるのかを検討していきました。日光への移住者が参加しやすい環境づくり、成人女性でも参加ができる祭りの構造改革などが考えられますが、変化を柔軟に許容できる市民（主に祭りの中心になっている成人男性）の意識が鍵になることでしょう。「次世代の担い手」として最も期待できる「現在の子ども」の人数が少ない分、別の仕組みを考えることは急務でもあります。

自分の研究が一段落してから別の祭りを見てみたところ、宇都宮市の「ふるさと宮まつり」が非常に興味深い。宇都宮青年会議所が中心となって白紙からスタートした祭りで、今年で第43回というまだ歴史の浅い祭りですが、いまや2日間で50万人が来場という規模に成長。そして山車・屋台・神輿・郷土芸能などのほかに、第40回（2015年）から幼児が踊る「宮っ子パレード」が組み込まれています。今年は幼稚園児、保育園児、計4700人が参加しており、その両親や祖父母らの来場でさらに賑わうだけでなく、20年後、30年後の祭りの担い手としても期待できます。もちろん、宇都宮市にも少子高齢化の問題はありますが、地方都市の「新しい祭り」も調べてみると非常に面白そうです。

（国際学研究科 国際社会研究専攻 第18期修了生）

（2018年8月21日原稿受理）

## New

### 東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん（国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期期生）が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニューズレターを創刊しました。第5号の主な内容は以下

の通りです。1. ご挨拶 祝！東南アジア支部創設 1 周年 2. 懇談会@バンコク 第 1 回 UU-AA 同窓会総会開催@バンコク 3. イベント 日本留学フェア@バンコク 4. Relay Interview 平田勝博さん 5. タイの昨今 連載コラム No.5 -LINE は生命線- 大畑美優紀 / 狙えインスタ映え！？ 第 1 回アジア取材雑記 谷澤壮一郎 / 今旬のイチマイ 第一回 とともに感じる東南アジア トムソン（渡辺）はる 東南アジア地域在住の同窓生は積極的に声を掛け合っていたりすることを祈念しています。

### EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 27 号の内容は、1 イタリア 橋崩壊、死者 39 人に政府は運営企業の責任追及 2 EU 支部だより -暑さをしのぐ工夫- です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

### 編集者のひとりごと

●今春から三重大学に拠点を移された神山英子さん（国際社会研究専攻第 7 期生）が紹介してくれた庵 功雄著（一橋大学国際教育センター教授）岩波新書 1617『やさしい日本語—多文化共生社会へ』を一気に読む。この本は副題にあるように多文化共生社会実現のために言語（ことば）を通して貢献できることを包括的に考えられた内容になっている。目次構成は、まえがき、第 1 章 移民と日本、第 2 章 <やさしい日本語>の誕生、第 3 章 <やさしい日本語>の形、第 4 章 外国にルーツを持つ子どもたちと<やさしい日本語>、第 5 章 障害をもつ人と<やさしい日本語>、第 6 章 日本語母語話者と<やさしい日本語>、第 7 章 多文化共生社会に必要なこと、あとがき、参考文献、付録<やさしい日本語>マニュアルになっている。ぜひ、多くの同窓生に読んでもらいたい必読書である。

●8 月 8 日から 10 日まで、意匠学会参加と研究調査のため京都を訪問した。今年は熱中症におよぶ厳しい暑さだったが、台風の影響もあって予想外の気候で京都滞在を過ごした。市内は外国人観光客が多く、筆者が宿泊したホテルの朝食時には欧米の観光客で、「ここはどこ？」という有様でした。学会会場は同志社大学でしたが、明日館という新しい施設のカフェテリアはホテル並みのインテリアであり、学生対応が一段と進化していると感じた。

---

編集後記：2010 年 4 月 26 日から 知求会ニュースのバックナンバーは 国際学部同窓会 HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 [chikyukai@freeml.com](mailto:chikyukai@freeml.com)

---